

信用創造なる事態

川 合 一 郎

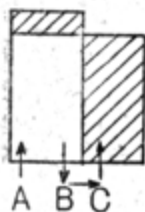
1

信用創造といわれている事態はいかなるものであるかを明らかにすることが小稿の目的である。まずその手懸りとして信用創造論の今日の定説たるフィリップス説の本質をもっとも簡単な形で要約したものとして周知のハイエクの説明をかりよう (Monetary Theory and the Trade Cycle, 1933. 野口譯 106—110 頁)。その要旨は銀行組織の中のただ1つの銀行については信用創造は不可能であるが、銀行組織全體については信用創造が可能なりというにある。まず「單一銀行の取扱手續」から。「今この銀行に、ある金高の現金が新に預入れられる (預金者をAとする、以下同様一川合)」(傍點一川合)。支拂準備は1割とする。「今銀行は新預金の9割を貸出し、而してその借主 (B一川合) はすぐに全額を使用したと假定せよ (例えば原料買増しのために)、しからは預金に対する手許現金は再び1割に減少する。これをもって、銀行が方針を変えざるかぎりには、その銀行單獨の貸出力は、新たなる預金の全額を貸切らざるうちに既に盡きることとなる。」(以上、1行では創造不能説)。

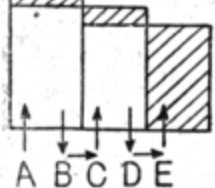
第一銀行



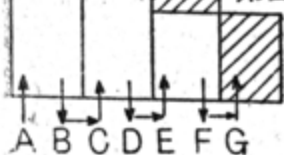
A 第二銀行



第三銀行



第四銀行



A B C D E F G

「しかしながら1銀行における新預金が、銀行團體の貸出力に対する影響にいたっては、この取引にては尙盡きたといわれない。もし借主(B)が、例えば賃金支拂の如き、直ちに消費財市場に向い易き方面に使用せず、これを専ら原料とか半製品とかの買入にのみ充てたりとせんか、さる場合には、多くは小切手を用いてその代價を支拂うべく、而してこれらの賣手 (C) は取立のために、まずその受取りたる小切手をわが取引銀行に振込み、預け金となすであろう。」「第2の銀行に於ても同様、預金の1割を手許準備となすならば、この新預金の9

割を貸出しうべく……」(即ち各銀行は預り金の9割迄は之を貸すことができ、而してそのために他銀行における同額の預金を増加するが故に、始めの預金高に對しては $0.9 + 0.9^2 + 0.9^3 + \dots$ 倍の貸金を生ぜしめる。而してこの收斂無限級數の和は9であるから、銀行は外部の源泉から流入してくる現金によりて、極端の場合には、その9倍の額まで信用を創生しうる。) (以上、全行なら創造可能説)。いまハイエクのこの説明を圖示すれば左の通りとなるであろう。

2

さて以上の説明を手懸りに信用創造なる事態および信用創造「論」の位置を検討しよう。紙幅の都合上、問題をつぎの諸點に限定する。すなわち(1)本源的預金→貸金という順序關係は何を意味するか。(2)銀行との取引者 A, B, C, D… 相互の關係は何を意味するか。(3)1行不可能、全行可能とはいかなる事態か。

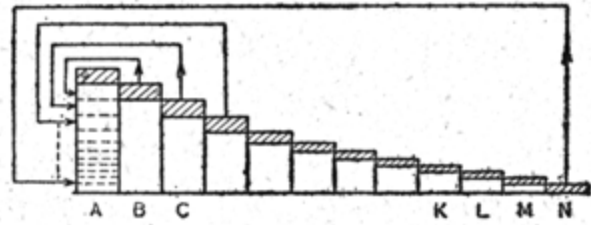
まず再生産の過程の方から接近しよう。消費財の完成までの生産工程がN個の工程に分たれ、その1つずつの工程では前工程から受つた過去勞働の成果の價値の $\frac{1}{9}$ の新價値が附加されるとする。逆に生産物價値の方からみればそのうち $\frac{1}{10}$ が價値生産物、 $\frac{9}{10}$ が舊價値の移轉分となる。このような生産物がさいごの完成消費財となったときに10圓の價値をもつとする。(最後の段階での價値をまづきめるのはここでは不適當であるがハイエク説と比較しやすくするためである。)そして各繼次工程は夫々獨立の商品生産者=個別資本によって擔はれ、したがって中間生産物の、一工程から他の工程への、移行は賣買を介してのみ行われる、とする。一定の時點をとってみると各繼次工程が並存し、同時に次々に一工程から次工程への移行・販賣が並存している。したがって一定時點におけるこれら商品全體の總價値=價格は $10圓 + 9圓 + 8.1圓 \dots = 100圓$ となる。これは實現さるべき價格總額である。流通速度を問題としなければ100圓分の貨幣商品金が必要である。この貨幣商品金の生産費は流通空費の1つとして利潤からの控除となるから資本にとっては何とかして節約したいものである。ところが貨幣商品金は流通速度を増大させれば節約しうる可能性をもっている。

この流通速度の増大は、購買手段としても支拂手段と

しても行いうる。ところがこの2つの場合における流通速度増大の効果には若干の相違がある。すなわち購買は商品と貨幣商品金の同時交換であるから、購買手段としての流通速度は商品自體の姿態變換速度、ひいては、市場に次々に商品が入ってくる場所の再生産のテンポ自體に制約されざるをえない。ところが支拂は商品と貨幣商品金の時間を隔てた異時交換であり、貨幣商品金の登場、授受を商品の登場授受から時間的にきりはなしうる。すなわち商品給付と貨幣反對給付の時間的拘束をゆるめることができるから、貨幣の流通速度に及ぼす物質代謝のテンポの制約を一應緩めることが可能である。すなわち支拂だけを一定時點に集中して、その時點における流通速度を大ならしめることができる。支拂手段としての方が流通速度増大による効果が大である。ここに、貨幣商品金の節約に、貨幣を支拂手段として登場せしめる前提たる信用が、資本によって用いられる理由がある。そしてその信用のうちでは必要となる貨幣の生成以前の信用、貨幣を必要ならしめる事態とその節約の條件が未分化に結合してあらわれる商業信用がもっともこの目的にかなっている。商業信用によって諸支拂の連鎖が結ばれていると、支拂手段の流通速度増大の條件が準備され、貨幣商品金の節約が容易になる。商業信用は1つの商品の各生産工程が縦に各個別資本によって分擔されている関係を、企業の獨立を維持したままで、これが垂直的統合の形で結ばれていると同様の効果を生ぜしめる。しかし商品生産である以上さいごに貨幣商品金による支拂をさけることはできない。このことはまた相手が資本家でない最終消費者への販賣は商業信用を與えることができず、現金賣でなければならぬことと結びついてくる。完成消費財の(資本制商品)生産者は最終消費者に現金賣してえた貨幣で支拂にあてるのである。これは簡單には次圖のようになる。E←D←C←B←A。販賣された商品は各10圓、計40圓。Dが最終生産者、Eは消費者。←は現金賣、←は商業信用をしめす。したがってE←D間のみ現金賣。この10圓個貨で計40圓の實現さるべき價格總額を決済できることになる。

しかしこの例は各人の受ける信用、與える信用を同額としたもので現實に反する。現實には各人の受ける信用と與える信用の額には違いがある。受ける信用は自己の生産物の價值のうちC相當分のみで、與える信用はc+v+m相當分となる。この差たるv+m分を代表する貨幣は何れも購買手段としてつかわれる。v分は労働者に現金で渡され彼の手で消費財購買手段として、M分は資本家の手で直接に自己の消費財の購買手段に使われる。最終消費財生産者は各段階の資本家、労働者に現金賣を

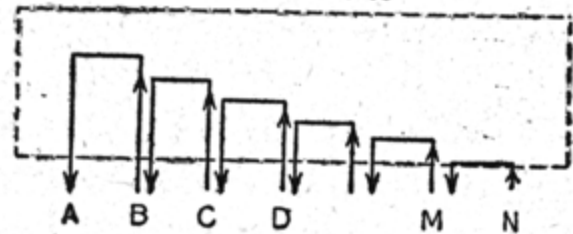
してえた貨幣で、彼が受けていた商業信用債務を返済する。販賣代金(c+v+m)と受けていた信用(c分)の差額は今の支拂には不要であるから、また次の賃金支拂、自分の消費財購入のために留保される。これを圖示すれば次の如くなる。1)



3

以上の段階では産業資本家と労働者以外には誰もいない、したがって専門の貨幣取扱業者はいないと假定してきたが、ここでこれを導入する。貨幣取扱業者はただ1人しかいないとする。ここでは事態に何の變化もない。さきの場合でも、各資本家は自分の商品の實現のために必要な貨幣商品金を合計100圓用意してもっていたのに、

貨幣取扱機關



信用による支拂手段の流通速度増大で、個貨としては10圓分しかいらず、90圓分は餘分となっていたのであるが、今度は貨幣取扱業務を別の機關に集中した結果、この遊離分90圓が貨幣取扱業者の庫中で遊離することになったにすぎない。ただこの場合かかる節約のもつ商品生産者の社會性がより明白となってくる。というのはかかる節約=流通速度増大ということ自體1人では勿論のこと2人の資本家だけでもできない。少くとも3人以上が手をつながねば貨幣の流通速度増大は問題にならぬ。貨幣

1) 各人にとって矩形の空白部分は受けた信用、空白プラス斜線部分は與えた信用、斜線部分は與えた信用と受けた信用の差額、現金支拂の部分。右方Nから進行してゆく看點からみれば、例えばLは空白分だけを掛で原料を買い、斜線分だけ賃金支拂および自己消費支出のために現金を投ずる。そして生産された商品空白プラス斜線部分をKに掛で賣る(=貸付)。そしてのちにKから現金が支拂われた(=回収)のちにその中から空白部分をMに返済し、斜線部分はつぎの賃金支拂、自家消費のために留保しておく。因に斜線部分が斜線+空白部分に對する比率、すなわち $\frac{v+m}{c+v+m}$ 、こゝでは10%が、ハイエクが無批判に前提している準備率の本來的意義である。

節約の程度は信用に参加する資本家の數に比例するのであるから、貨幣の節約は商品生産下における社會的契機的發展以外の何物でもない。したがって節約されて遊離した貨幣材料金は各個の資本家の所有であってしかもそうでない。1人1人にとっては十分に役に立った上で餘ってくるからである。遊離貨幣は各資本家はその構成の1員でありながら、しかも彼ら個々人の外部にたつ資本家社會全體のものである。かかる性質は貨幣取扱業務の集中によって遊離貨幣がその個々の所有者の手許からはなれた別の1ヵ所に集中されるとより明白な形であらわれることになる。

ここにこのように各資本家が一員でありながらその外部に立つ資本家社會を外部的に象徴するものが必要となる。すなわち各資本家の所有でありながらしかも各個別資本家の所有でない、資本家社會的な所有の主體の象徴者である。この地位に、それまでは單なる貨幣取扱業者であった銀行がつかされることになる。銀行はたんなる貨幣取扱業者たることをきそとしてかかる資本家社會の象徴たる地位を兼任することになる。

資本家社會の社會的性質ゆえに遊離された遊離貨幣が、各個々の資本家の外部にたつ資本家社會の所有となると各個別資本家が今度それを使用するときには、自分のものでありながら自分のものでないのだから、社會から借り入れる形をとってあらわれることになる。したがってこの社會性格の象徴たる地位に銀行がつくようになると、資本家たちは、本來は自らの貨幣の使用であるのに銀行から借りうける形をとることになる。自分たちの貨幣の貨幣取扱依頼のための預託は預金であり、自分の貨幣の使用は借入となる。銀行からみれば同じことは預金の受入れであり、貸金となる。

他方資本家社會を象徴する銀行はこの資本家社會の所有たる貨幣をもって、各産業資本家たちが夫々後行者に與える商業信用の返済を保證してやることによって商業信用の一層の伸長、したがって貨幣節約を助ける。ただし要求に應じての出納を行う貨幣取扱業者たる銀行の行う保證であるからその「保證」は「一覽拂」「保證」たらざるをえない。遊離した貨幣だけでなく、産業資本家の使う一切の貨幣が銀行の貸付ける貨幣としてあらわれるにいたれば、産業資本家自身の現金出納さえ、一覽拂保證の債務の履行としてあらわれざるをえない。

4

さてここまでの状態から、はじめにかかげたハイエクの記述をみてみよう。

(1) 本源的預金→貸付について。ハイエクは、Aか

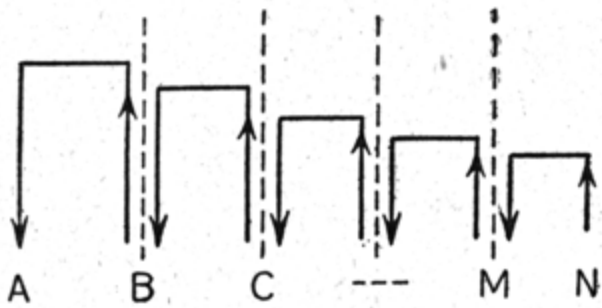
ら銀行に渡される貨幣を本源的預金、銀行からBに渡される貨幣をBに對する貸付としている。これはAがBから受けた商業信用を銀行が保證して肩代りしてやったために、AのBに對する返済金がまづ銀行に入ってくることに、次にBがその代金を銀行から回収し受取るという序列と正反對である。A←Bの商業信用の間に銀行が入り、A←銀行←Bとなっていたところ、その返済に當り、銀行に對するAの借入返済がハイエクではAの銀行への預金、Bの銀行を通しての回収が、銀行のBへの貸付となっている。かかる序列轉倒はつぎの理由による。商品の流通の看點からみれば進行は右から左へ A←B←C…←Nとなり、商業信用もこの方向に授與されている事態を、逆に、貨幣による決済支拂の看點からみること、したがって商品生産者の立場ではなく貨幣取扱者、しかも貨幣資本の管理者としての銀行の看點からみると同じ系列が左から右にみられることによる。商品、したがって商業信用の授與の方向とは正反對の方向に貨幣は動くからである。Aの銀行に對する借入の返済のための現金交附は銀行にとっては預金の受入れ、銀行がBから受ける債務の返済はBへの貸付に顛倒するのである。以上ハイエクのいう本源的預金は再生産的には商業信用の借入の返済金の預入なること、貸付は本來は預金引出なることをみた。

(2) ハイエク説ではAとBは商品賣買の關係に立っていないことについて。われわれが以上みてきた状態では、AはBから、BはCから、CはDから……夫々直接に商品を買うという關係に立っていた(A→B→C→D…)のに、彼の設例ではA・B、C・Dは何ら商品賣買關係にたっていない(A, B←C, D←E, …)。このために彼の説明した状態は貨幣節約の本來的な事態、再生産との連關に直結していない。流通速度増大による貨幣節約は商品流通においてのみあるからである。

彼がかかる設例を採用したのは次の理由による。それは商業信用と貨幣信用の相違にある。彼は貨幣節約を商業信用の段階でなくすでに貨幣信用の段階でみているからである。これを明らかにするために流通速度増大による貨幣節約を別の面、すなわち資金量と個貨の量の關係の看點からみよう。このこと、すなわち一定數量の個貨がいくばくの資金形成を媒介するかは、一般には、(i) その個貨が媒介する商品轉形の度數と、(ii) 同一個貨が次々に商品價值實現に使われるのを媒介してやるところのその貸付の度數、に依存する、とされる。いくら商品價值の實現に役立ってもその貨幣が貸付によってその貨幣の受取り人たる賣手から別人に渡されなければもう一度價值實現に役立ちえないし、またいくら貸付の連鎖が

でき上っても又貸し、轉貸の連続では貸付資本は1つしか形成されない。だから同一個貨が大なる資金形成を媒介しうるためにはこの2つの条件の結合が必要なのである。以上の規定は貨幣信用の場合についてのものであるが、商業信用の場合にはこの2つの条件は未分化に結合したままで存在している。商品轉形と貸付が未分化に結合しているからである。貨幣信用においてはじめて兩条件が分離しうることになる。ハイエクの設例はすでに貨幣資本家と機能資本家が分化している段階の事態をみたものである。それはしかし無批判的なものであるために信用創造=貨幣節約の再生産的な眞の本質たる商業信用の連鎖との関連を透察しえていない。

(3) 1行創造不能、全行可能説について。さきにも



た圖に戻ろう。この圖を點線のところから分割してみよう。すると點線で區切られた1つずつについては何らの貨幣節約も行われぬ。なぜなら他の取引から切はな

れ孤立して考察されたたんに2人の賣手買手の間だけの貨幣流通をとるかぎり流通速度なる範疇はない。しいていえば1にすぎない。實現さるべき價格10圓の決済に必要な個貨は10圓であってここに節約はありえないからである。したがって全體としてはいくら信用の連鎖が結成されていても、それを1つずつの構成環にきりはなして孤立させてみると節約もその轉倒的表現たる創造も問題にならぬ。貨幣節約、遡れば流通速度増大は全く商品生産者社會的にのみおこる事態だからである。(商品生産者社會は最低3名の構成員を必要とする)。創造は全體としてのみ存在する。1行不能、全行可能説は商品流通の立場からでなく、貨幣流通の立場、それも貨幣取扱業者、それも銀行の立場から、1商品取引を1銀行におきかえて表現したものであり、上記の事態の特殊に銀行家的な反映である。だから1行不能説が結果的に偶然あてはまるためにはまづ取引者の數より一つ少いだけ銀行があり、1銀行は2人の機能資本家としか取引しないという奇妙な前提の下でのみいえることになるにすぎない。銀行が相連続する取引關係にたつ3名以上の機能資本家と取引關係に入れば創造論の論法でも、1行でも、自行の中での流通速度増大、貨幣節約、創造は可能となる。